

豊かなコミュニケーションを図ろうとする子どもの育成をめざした外国語活動・英語学習

1 外国語活動・英語科で願う豊かな学びの姿

〔小6〕○今日は2回目の外国語活動のフリマでした。2回目になるとこの前わからなかったこともできるようになったからすごく楽しかったです。また、いつか学校じゃなくても、やってみたいと思います。

上記の感想は、中学校教員が小学6年に外国語活動を行った際に、児童がふりかえり用紙に書いたものである。児童は積極的に英語を使って、友達とコミュニケーションを図ろうとただだけでなく、同時に英語を使う楽しさも味わっていた。そして、「次は英語でこんなことを言ってみよう」「こんなことをやってみよう」という思いを多くの児童が感じることができた。

小学校では、小学5、6年のすべての外国語活動は学級担任とALTもしくは外国語活動担当教員とのチーム・ティーチングで行っている。また、小学校の外国語活動から教科としての英語へのスムーズな「学びのつながり」を図るために、毎年外国語活動のカリキュラムを再検討し、新たな年間指導計画を作成し、実践を行っている。

中学校では、上のような思いや願いをもった児童が、教科としての英語の学習に取り組む上で、それまで音声では理解できていたことを文字として理解させ、そして、文法的なルールに則り、表現していく過程をとっていけるような授業展開を行っている。附属中学校の全学年で毎時間取り組んでいるスピーチ活動でのふりかえりを紹介する。

〔中1〕○質問を考えるとときに新しい表現が覚えられるからいいなと思った。
○日本語ではすぐに（頭の中で）表現できるけど、少ない語い数で英文をつくることに苦心しました。自分の思っていることを早く英語で言えるようになりたいです。

本部会では「豊かな学びの姿」をただ単に基礎的・基本的な知識や技能が定着している状態を指すのではなく、他者とのかかわり合いを通して、それらを高め合い、探求心をもってさらなる自己の伸長を図る姿をとらえ、以下のように定義し、実践を行っている。

- 友だちとのかかわり合いを大切にし、互いの考えや気持ちを伝え、それを尊重しあう姿
- 知的好奇心や課題意識をもって学び、自己の伸長を図る姿

また、スピーチ活動以外にも自己表現力をつけるための様々な活動を授業の中に取り入れたり、学期ごとにはまとめとしてのスピーキングテストを行っている。下はある授業での生徒のふりかえりからであるが、本部会が願う姿に一步步近づいていることがよくわかる。

〔中3〕○まだまだ文法の理解も会話の表現の仕方なども全く足りていないことがわかりました。もっと練習が必要だと感じました。
○時と場合に応じた受け答えをすることはすごく難しいと思いました。自分の中にある言葉の引き出し、文章の引き出しからどれを取り出してどのようにつなげればいいのかとても考えさせられました。

2 昨年度までの研究の経緯

昨年度、外国語活動や英語科における思考力・判断力・表現力を以下のようにそれぞれ定義した。

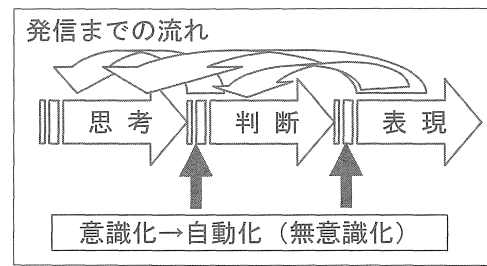
- 思考力：伝えようとする事柄について、文法的なルールに則って考えることができること。
- 判断力：場面、状況、相手の表情等に応じて言語材料を選択し、使い分けられることができること。
- 表現力：思考・判断を通して言葉として相手に伝えることができること。

思考力とは、何か伝えようとする事柄を既習の文法的なルールに当てはめ、そのルールに従って考える力とした。これには、普段からの教師の的確な文法指導とそれによる生徒の文法的理解の定着つまり、基礎・基本の習得が重要となってくる。外国語活動では文法的な指導は行われないので、ここでの文法的なルールとは様々な英語表現やそれらを使う上での約束事を意味している。

次に、判断力とは、思考の段階で出てきたいくつかの単語や表現のリストの中から適切なものを選択し、使い分けができる力とした。つまり、伝える相手の表情や状況等のさまざまな要因を考慮し、その時点で一番適切であろうと思われる単語や表現を選び出す力である。

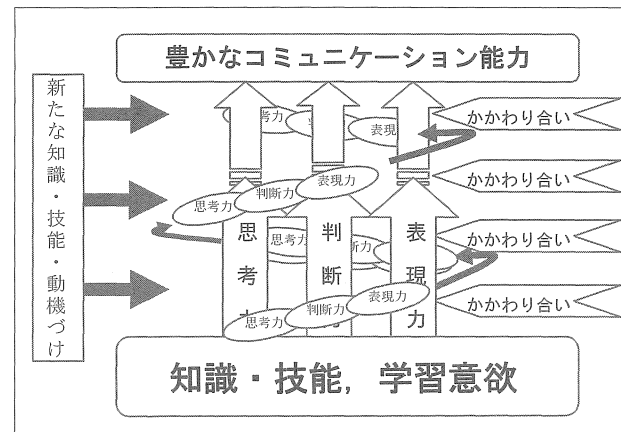
最後に、表現力については、思考・判断の段階を通して実際に書いたり、話したりすることによって相手に伝える力とした。しかし、ただ単に言葉を伝えるだけでなく、相手や状況によって、顔の表情や声の大きさ、トーン、ボディランゲージ、話す態度など自分の意見や気持ちを相手に伝えるときに必要な話し方もこの表現力に含まれると考える。

思考・判断・表現という発信までの流れを図に表すと右のようになる。それぞれがバラバラにあるのではなく、自分の考えや思ったことを発信するためには思考→判断→表現という一連の流れをとるのだが、もちろん逆向きに矢印が向くこともある。発信をするまでにある段階から次の段階へ移る場合もはじめは時間が多く必要であるが、練習を重ねることで少しずつ短くなっていくと考えられる。



また、豊かなコミュニケーション能力に向かって、思考力・判断力・表現力を育成していくためには個人の努力だけに頼っていても効果は少ない。練習を一緒にしたり、自分のスピーチを聴いてくれたりする友だちの存在が重要になってくるだろう。例えば、自分ひとりでは1つしか思い浮かばない表現でも友だちとのかかわり合いを通して使える表現が何倍にもなっていくことは簡単に想像できる。

よって、昨年度は豊かなコミュニケーション能力の育成をめざして、普段の授業からこのようなかかわり合いを意図的に作っていき、思考力・判断力・表現力を高めるための実践を重ねてきた。例えば、中学校を例にとると、今まで学習したことを使ってある程度まとまりのある英文を書く活動（スキット



作りや条件英作文等) や子どもたちがお互いに英語を使って自分の意見を述べたり、それに関して質問し合ったりする活動（1分間チャットやスピーチ活動等）、そして、みんなに向けて自分の伝えたいことを発表する活動（スピーキングテスト、英語弁論大会等）を単元計画や年間計画に取り入れた。そうすると、子どもたちは友だちとのかかわり合いを通して、友だちの表現の中に自分でも使ってみようという表現を見つけたり、自分の文法的な間違いに気がついたり、友だちからのアドバイスを受けたりしながら、表現の幅をさらに広げていくことができた。また、単語や文法といった英語に直接関係はしないが、様々な考え方や価値観に触れることができたことは思考力・判断力・表現力を高める上で大きな収穫であった。

このようなかかわり合いをペアからグループ、グループから学級全体、学級全体から学年全体、学年全体から学校全体へと広げていくことができれば、さらに学びは深まるように考えられる。昨年度はペアやグループでのかかわり合いに焦点を当てて単元構成や授業づくりを行ってきたが、そこからさらに教師が学級全体への学び合いへと意図的に広げていくことができれば、さらにその効果は何倍にもなることと思う。また、一貫教育の中で子どもたちの発達段階を踏まえた思考力・判断力・表現力を明確にし、教師がどのようにはたらきかけていけばよりよい学び合いとなるのかということについても整理していくことも大切であると考えている。

3 本年度の研究

(1) 思考力・判断力・表現力についての11年間のつながり

本部会では昨年度定義した思考力・判断力・表現力をそれぞれの段階のつながりが見えるように以下のように定義した。

初等部前期	遊びや生活の中で体験しながら、自分の願い、思い、考えを確かにもち、それを表す力
初等部後期	相手が伝えようとしていることを、今までに学習した表現や、表情、身ぶり手ぶりをもとに考えたり、場面や状況に合わせて、適切な表現を使って相手に伝える力
中 等 部	既習の文法的なルール（または約束事）に則って考え、相手の表情や状況等のさまざまな要因を考慮しながら、最も適切な単語や表現を選択し、書いたり、話したりすることを通して、相手に自分の考えや気持ちを伝える力

初等部前期では、ALTや国際交流員等との交流等を除き、基本的に外国語活動は行っていない。しかし、前述のように本部会では「豊かな学びの姿」をただ単に基礎的・基本的な知識や技能が定着している状態を指すのではなく、他者とのかかわり合いを通し、それらを高め合い、探求心をもってさらなる自己の伸長を図る姿ととらえている。よって、本部会ではこの時期をその後のコミュニケーション能力の素地を養う重要な出発の段階と考え、外国語活動・英語科という狭い枠組みだけでなく、大きな枠組みでとらえていく必要があると考え、総論で示してある本学校園全体でとらえるものと同様とした。

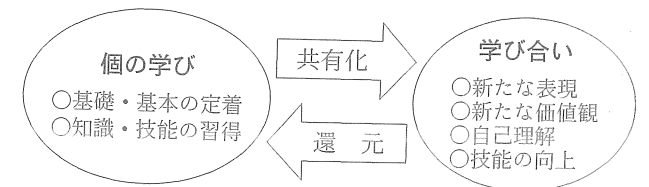
本学校園では今年度から年間17時間ではあるが小学3年から外国語活動を実施している。とはいえ、初等部後期では、学習が始まったばかりの段階であり、小学5年でもインプットの量はかなり少ない。また、この段階は、新学習指導要領で示されているようにスキルの習得を目指しているのではなく、体験の中で英語を使用・活用することを通して、コミュニケーション能力の素地を養い、言語への感性を育むことをめざしている。よって、この時期の子どもたちにとっては、思考・判断する段階でいかに相手が発信した情報を上手に（適切に）受信するかが、その後の表現していく段階に大きな影響を与えるのであり、表現力と同様に受信する力にも焦点を当てながら、この時期の思考力・判断力・表現力を上記のように定義することとした。

中等部については、外国語活動と教科としての英語が混在する段階であり、小学6年の外国語活動は、1年後から始まる教科としての英語を見据えながら行っていくことが当然求められる。つまり、コミュニケーション能力の素地を養いつつ、教科としての種を植えていく段階と捉えている。また、この時期は本校11年間の一貫教育の最終的な段階であり、その後も高校や大学等において英語学習を進めたり、語学の習得をめざしたりしていくうえでもっとも基本的な力であり、必要不可欠な力であると考えられる。そして、このような力を授業の中で様々な活動や教師のはたらきかけを通して、高めていきたいと思う。

(2) 思考力・判断力・表現力を育て高めるための授業づくり

学習方法や指導方法にはさまざまなアプローチの仕方があり、特に語学の学習では、学習者のアウトプットの量の多さや指導者が学習者の間違いをすぐに修正できる点等、少人数での指導が何かと有効であるとよく言われている。確かに、子どもの知識・

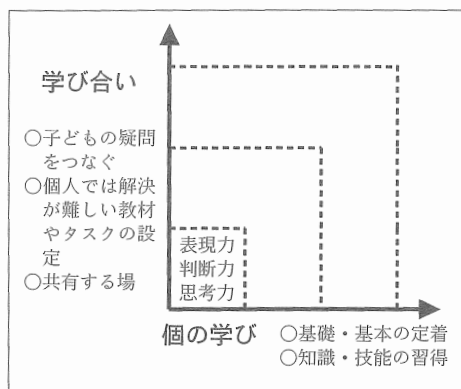
技能の定着や向上を図る上では少人数の指導の方が効果的である。昨年度の研究においてもペアやグループなど少人数での子ども同士のかかわり合いに焦点を当てて実践を行ってきたが、かかわり



合いを通して、多くの意見や価値観に触れ、そこから子どもたちは使える英語の表現の幅を広げることができ、結果として思考力・判断力・表現力の育成に有効であるということが明らかとなった。そこで、さらに一人ひとりがより多くの意見や価値観に触れたり、それらを自分のものとして取り入れたりするためには、かかわり合いをペアやグループから学級全体へと広げていくことも必要だと考え、今年度は、

学級全体での学び合いの場を積極的に設定していくことにした。そして、子ども同士が自らの意見を出し合い、それらを深めたり広げたりしながら表現の幅をさらに広げることができるような実践をしたい。そして、これに教師の効果的なはたらきかけを加え、子どもたちの思考力・判断力・表現力をさらに育て高めていきたいと考えている。

すべての学習活動に学び合いを取り入れさえすれば、子どもたちの思考力・判断力・表現力が自然と伸びていくわけではない。まず、学び合いを効果的に進めるためには個の学びが大切となってくる。個の学びと学び合いの関係から、思考力・判断力・表現力を図に表すと左下のようになると考えている。基礎・基本の定着や技能の習得は主に生徒一人ひとりの個の学びによるところが大きいが、この部分



がしっかりしていないまま学び合いを行ったとしても、その知識や技能をうまく活用することができず、学びは深まらない。つまり、教師が個の学びの状態を見極め、学び合いで深めたい教材と照らし合わせ、指導を行っていくことが大切である。

教師のはたらきかけをいかにやっていくのかも学び合いを深めるためには必要不可欠である。まず、私たち教師は一人ひとりが支え合える関係作りを学級の中にすることから始める必要がある。この関係があってこそ、子どもたちはわからないところを遠慮せずにお互いに聞き合えたり、友だちの意見に耳を傾けたりと問題意識の共有化を図ることができ、教師は子ども

たちの疑問をつないでいくことができるのである。また、学び合いでは、個人の手だけでは解決が難しいようなある程度高いレベルの教材やタスクの設定が必要となってくるであろう。そのような教材やタスクを子どもたちに課すことで、学び合いはさらに深まると考えられる。そして、このような活動をする場合、あらかじめリーダーを決めて行うのではなく、個人の責任を明確にしながら、教師は児童・生徒の深い学びを妨げないようにしていきたい。学び合いの中ではリーダーは次々と変わっていくことが予想されるし、このことはむしろ自然なことであり、教師があまり積極的にかかわりをもちすぎると、子どもたちは教師に頼りすぎたり、教師の助言がかえって問題を複雑にしたり、問題の焦点をぼやけさせ、結果として学び合いは深まりが薄れ、効果的に進まなくなったりすると考えられるからである。教師は子どもたちの学びをコーディネートするような存在としてかかわってきたい。

4 成果と課題

授業の中に学び合いを取り入れたことで、授業の進め方や指示の出し方、板書の仕方や教師の立ち位置など実に多くの変化が生まれた。子どもたちについて言えば、一人ひとりが発言する時間が増えたことで、理解度も増し、全体的に授業の質が高まった。学び合いを通して、本部会がめざす、他者とのかわり合いを通して、それらを高め合い、探求心をもってさらなる自己の伸長を図る姿に十分迫ることができたと考えている。

課題としては、大きく次の2つが考えられる。ひとつは、どのような教材やタスクを指導計画の中に取り入れていけば効果的な学び合いとなるのかということ、つまり、教材やタスクの開発と指導計画の編成を行っていく必要があること。そして、もうひとつは、学び合いの場面をいかに評価していけばいいのかということである。今後このことについて協議し、新たな評価規準の作成に向けて研究を進めていかなければならないであろう。(文責 小澤 正則)

【参考文献】

- 斎藤栄二「自己表現力をつける英語の授業」三省堂
- 東京学芸大学附属小金井中学校「学び合いで輝く・伸びる・高め合う」東洋館出版社
- 東京大学教育学部附属中学校「学び合いで育つ未来への学力」明石書店
- 三崎隆『「学び合い」入門』大学教育出版
- 「英語教育(7月号)」大修館